

十年前の気持ち教えてくれたこと

山形県最上町立最上中学校

三年 矢作 莉子

「ただいま、あー疲れたー。」

毎週土曜日。バレーボール部の練習が終わって、家に帰り着く。バッグを下ろし、ソファに飛び込み目を閉じると、朝まで寝られる自信がわいてくる。

「あ、そういえば午後から習字あるんだった。だるっ、行きたくないなー。」これが、土曜日正午の私である。

私が習字教室に入ったのは五歳の冬だ。それから続けてきて、今年で十年目になる。

初めて筆を持った日のことは、今でも鮮明に覚えている。それまで筆記用具といえば、鉛筆かペンかクレヨンしか握ったことがなかった私にとって、「筆」とは実に魅力的なものだった。鉛筆と比べると持ち方も持つ位置も全く違う。他にも様々な違いがある中で、一番の大きな筆の特徴は、書く線の太さを自分で調節できる点だ。筆は、力を入れて書くと太い線を書くことができる。逆に力を抜いて書くと細い線を書くことができるのだ。

しかし、最初から思い通りの線を書けたわけではない。私に渡された初めての課題は、「はる」という平仮名二文字だった。先生や先輩に教えてもらいながら、緊張しながら、ゆっくりゆっくり、一生懸命

命新しい筆を動かす。そしてやっと書き上げた、その「はる」の二文字は、線の太さが全て同じで、メリハリのない作品になってしまった。自分の名前に入っているため、鉛筆では書き慣れているはずの「は」の文字でさえ、思い通りに書くことができなかったのだ。「私もうまく書けるようになりたい。」と思うのと同時に、こんなに難しい筆で、どんな線でもどんな字でも上手に書ける先生への憧れの気持ちが生まれた。そして、筆の面白さに惹かれた私は、それからどんな書道を好きになっていった。

しかし小学六年生の秋、先生は亡くなってしまった。大きなショックを受けたが、習字を続けることに決めた私は、「これからもっと頑張って、先生のような字を書ける人になる」という目標を立て、これまで以上に真剣に書道と向き合った。

そして私は中学生になった。小学生のときには、午後からの習字教室以外は予定が無かった土曜日にも、午前中に部活動が入るようになる。ランニングやダッシュ、筋肉トレーニングなども含め三時間近くみっちり練習。部活動が終わった頃には、もう体はへとへとに疲れていた。家に帰り、やっと休めるかと思いきや今度は習字教室に行かなければならない。そんな日々が続いた。いつのまにか書道は、私にとって邪魔な存在へと姿を変えてしまった。

きつと私は、書道が嫌いになったわけではなかったのだと思う。ただ、部活動をしてきて疲れている状態で午後から集中する、ということが苦だったのだ。それからというもの、習字教室に行くたびに、「だるい」「早く帰りたい」などという言葉が頭の中をよぎるようになった。そのような気持ちで書いた作品を、家に帰っていつものように両親に見せると、ある日父にこんなことを言われた。

「お前うまくなるためにどうすつかだが、何も考え

ねでただやんだやんだ書いてらべ。ほんなんらったうまぐなんねがらもう習字やめろわ。」

「え、なんで分かるの？」私はすぐにそう思った。見せた作品に書かれているのはただの漢字。「だるい」などのそんな言葉はどこにも書いていないのにどうして……？

そんな時、ふと、壁に飾ってある過去の自分の作品が目に入ってきた。それは、全ての線が同じ太さで、メリハリのない「はる」。何となく、今日書いてきた作品と見比べてみる。そのとき、私ははっとした。父の言葉の意味が分かったからだ。今日書いた作品は、何度も注意されているところさえ修正されておらず、「うまくならない」という気持ちも何も感じられない。その一方で「はる」からは、今日書いた作品からは伝わらないものが伝わってくる。それは、一生懸命さだ。確かに作品を書いたあの時、私は下手でありながらも自分なりにうまく書くことと頑張っていた。

それに気がついた頃、どこからか再び、初めて筆を持った時の感覚がよみがえってきた。鉛筆とは全く違う、筆先の柔らかな感じ。線の太さを調節する難しさとその面白さ……。十年前に私が感じたその気持ちは、私にもう一度、書道の面白さを教えてくれた。「書道が好きだ」という忘れかけていたその気持ちを、思い出させてくれた。

部活動を引退した今でも、疲れている時にその作品を見ると、何だか元気になれる。

「行ってきまーす。」

と言いながら、再度、「はる」に目をやる。「早く書きたいから走って行こう。」そんなことを思っ、今週も私は習字教室へと向かう。